

日々の歩みの中から

——現場での研究のすずめた——

海 卓 子

☆ 二子どもが活潑に遊ぶという二とは

年長組になったというのに、ともするとしょんぼりと突立って、みんなが遊ぶのを眺めているじんちゃん。(五、三年男)

「ダメ、ダメ」といって、強引に自分の主張を通そうとするか
つみちゃん(五、六年男)に、「ダッテ、カツミチャン、サッキ、シタモン」といって抗弁出来るようになったのに、どうしたと
いうのでしょうか。

例 六月二〇日 自由遊びの時に

「じんちゃんは例によって、庭の小山の下に突立って、馳けまわっていることもたちの姿を眺めている。よしあき(五、七年男)が玄関からとび出して来た。

小山の方に向かって馳けながら「ジンチャン、ジンチャン」と連呼する。じんはチラリと見て、眼元で笑う。

よしあきは「ジンチャン、オイデと手招きしながら馳けてゆく。じんは、ことばにつられて、小走りに後から馳け出す。よしあきはもう山のむこう側に降りてゆく。

よしあきが「オーイ」と声をかける。じんは立止って見下し、再び山の上からよしあきたちの姿を視線で追う。

これから数分の後、かつみ、てつお(五、七年男)が両手を四つに組んで、「ワッショイ、ワッショイ」とおみこしごっこをしてやってくる。じんの立っている前までくると、てつおは「ジンチャン、ノセチャル」

じんは、にこにこ笑いながら、言われる通り、組んだ手の上

にまたがる。しばらくもんでいたが、「交代」といって、今度はつおとじんが組み、かつみを乗せる。

二、三步歩くと、じんはもろくも崩れ、かつみがみこしから落ちる。

「ダメダー。ジンチャン」

つおと、かつみは、再び手を組み、じんをおいてきぼりにして去る。」

さつきも、今も、じんちゃんは、いっしょに遊ぼうとしますが、途中で落伍してしまっています。

じんちゃんは三月生まれで、五つも年上のお姉さんがいて、赤ん坊扱いをされています。時々「ボーヤガネ……。」といつては「チェッ、ボーヤダッテサ」。と皆にからかわれます。

早生まれと甘やかしからくるひ弱さが、この子の行動をたいへん消極的なものにしていくようです。

知恵づきは早いようですから、体力をあまり必要としない遊びや、しごとの場面ではどうでしょうか。きつと、様子がかわるかもしれません。

例 六月二一日 自由あそびの時に

「つおがボールで、誰かが作った「家」——箱積木で作ったも

の——に入って、何かしている。やがて、立方体や板を、運び始めた。

この時、廊下からじんが入室、つおの傍によって例の通り傍観。

つおが板を立方体の上にのせようとすると、じんは板の端をもって手伝う。片端を立方体に立てかけると、じんは急いで立方体を一持ってくる。つおのと揃え、板を水平におく。

これを見てつおが「ヨシヨシ」と言つて更に立方体を板の片端におく。じんは「ヒコウキ、ツクルンダロー——」とたしかめ、つおの手元を見ながら、左右つり合うように次々と組立ててゆく。大体形がつくと、

じんは椅子を運んで来て、
「テッオチャン、ココスワルトコロネ」

と提案する。じんは先生のところにかけてきて、「先生、キノウノ、カシテ？」

「ホラ、コウヤルノサ」（昨日は舟を作つて、シンバルをドラ代りに使つた）

先生「ああ、シンバル？」

こうして時には遊びをリードし、次々と発展させながら参加

している。」

このようなことから、しんちゃんにふさわしい相手は体力的にあまり差がないか、あるいは体力的に差がある場合でも、今日のように、体力をあまり必要としない遊びの場合は、自発的に参加し、活潑に遊ぶことができると考えられます。

☆ 遊びや、しことにも効果の限界がある

前述のように、ひとりの子どもが積極的に遊びに参加できるように、その子どもによって必要な条件があります。

今度は、一つの遊びや、仕事の面から、子どもの姿を見ると遊びやしことにも、それぞれ功罪があつて、絶対によい、というものはありません。例えば、台所にある包み一つにしても、菜切り、出刃、さしみ包丁というようにいろいろのものがあつて、どれもそのはたらきが同じではなく、それぞれむぎ、むぎがあるようなものです。

次に粘土製作の「こまを日誌からぬきがきして、その姿をはつきりさせてみましょう。」

組の子どもたちが成長してきて、互の評価がたしかになると共に、一部では、出来栄を気にして、神経質になったり、引

込思案になるようなことがみられてきた頃でした。

「はっぱの皿作り」という製作で葉型をとると一つ一つの枠を与え、誰にでも出来るといふ安心感を持たせてから、製作意欲をたかめようとしたのでした。

例六月一七日 年長男15人女10人計25人

ねらい

・ 安定した気分で自発的に製作にとりかかると。

・ いろいろな葉のあることに気付く。(どんな木や、草に、どんな虫がいるかということまでの観察に関連して)

・ ねんどへらの使い方を知る。

△キッカケ▽ 子どもたちの葉っぱ拾いから。

自由遊びの時、けいこ(五、一〇年女)

「ホラ、コンナハっぱ拾ッタ」といって、先生に椎と、いいぎりの葉を見せにくる。先生はまわりの子どもたちにも、椎の葉を見せて、「ホラ、これ、椎の葉よ。もうせん花を見たわね。」

穂になっているこれはね」「赤い実になるいいぎりよ」「まだ、ちがったはっぱがあるわね。とっていらっしやい」

ちはる、みつこ、ゆみこ、みゆき、よしお、りゅう三などが、笹の枯葉、あちさいの葉などを集めてくる。

けいこ「ヘナ虫がイルヨ。キテゴラン」山の上でちはるた
ちは、虫のぬけがらを囲んでいる。

先生「アラ、空っぽだわ。これ、何だか知っている？」

ひでこ「ヌケガラ」

先生「そう、ヌケガラね、虫が脱いだきものよ。ヌケガラがあるのだから虫がいるはずね」

よしお、りゅう三、ふみこたち、七、八人が、ワイワイ馳け出してゆく。

先生「ゴミのあるところやなんかも見るのよ」

(裏のごみ棄て場に、すかしたわらの幼虫がいたのを知っていたので)

「イタ!」「イタワ!」というこどもたちの声に、皆集る。10センチ大の淡緑色の幼虫をかこんで「この虫は何を食べるのだろう」先生「これと同じような虫が、いちちょうの木にいた。もしかしたら、いちちょうの葉を食べているのかもしれない」と話し、いちちょうの木を探しにゆく。

こうして持寄ったはっぱを利用して製作に入る。

ねんど製作。

先生「このはっぱ、なんのはっぱ」

こども「イチョウノハ」

先生「どうして？」

こども「ダツテ、オセンスミタイ」

先生「今日はね、こんなにたくさんはっぱがとれたから、これでお皿を作らない？」

手に粘土を取って、丸め、伸し、たたき、更にはっぱをのせて型をとる。粘土べらで切り抜き、葉脈のあとのついた皿を作る。

当番に、新聞紙、粘土板を配らせ、机上の用意が出来てから、めいめい好きなはっぱを一枚ずつとる。ねんどを渡す。

△中間指導▽

ほとんどのこどもが、最後まで自分で仕上げたが、

はっぱの置き方がまちがっていたもの……二人

へらでうまく切り取れないもの……二人、三人

粘土がうすく、うまくはかれないもの……三人

これらは、やり方を直接教えず、他人のしているのを見せ、やり方を工夫させるようにする。

△効果▽

葉型をとるといふ枠があるので、出来、不出来があまり自立

たず、殊に製作の苦手な、さとし、えみこなどが、安心して手を出した。

・いつもよりすばらしくよく出来たもの。

さとし、よしお

・製作は得意なのにあまりバツとしない

りょういち、やすよし

・熱心に何枚もつくる

大部分のこどもがそうで、殊に、ふみひこ、えみこ、ゆ

みこなどが目立つ。大体一時間余製作がつづけられる。

この製作で感じたことは、製作に自信のないこどもでも安心して手が出せるというよさはありますが、その反面、独創的なこどもには、物足りなさを感じさせるようです。

ですから、引込思案のこどもが多かったり、神経質で、出来栄を気にするような場合は、気易い気持ちにさせる、自信を持たせるというような意味で効果があります。

この上に創意を生かす自由製作が発展的に与えられれば、とまどうことが少なく、こどもの力を十分發揮させることが出来るのではないでしょうか。

☆ こどもと、あそびと、先生と、

先生のこどもをみる目が肥えていて、正しく問題を把握し—
こんなこどもに育てたいというねがわから、このままではいけないという問題の発見—このこどもは、どんな相手と、どんな遊びの中で、どんな風にしむけたら、という計画が立ち、集団の中で、こどもたちと、あそびをうまくマッチ出来れば、先生の役目ははたしたことになります。

けれど、去年、年長組でやったことが必ずしも、今年うまくゆくとは限りません。

今年は今年で、こどもたちの顔ぶれ、今までの遊びの経過などで、それぞれ独自のものもっています。過去の経験を生かして、今の、このこどもたちの動きにあわせて、有機的に活用すること。今日の経験を吟味して、明日の保育へ役立つものにする。これがはじめてよい経験、自分を育て、こどもをも育てる——と言えましょう。

(白金幼稚園)